

## 地理学に対するフェルディナンド・フォン・リヒトホーフエンの意義

A・ヘットナー 原著  
上村 直己 訳

*Ferdinand von Richthofens Bedeutung für die Geographie* von Alfred Hettner  
*übersetzt von Naoki Kamimura*

### 訳者まえがき

訳者は 2013 年 12 月、九州大学出版会から翻訳書『リヒトホーフエン日本滞在記——ドイツ人地理学者の観た幕末明治』を出版した。これは近代ドイツの代表的地質学者、地理学者で、また特に大著『中国』(*China*)で知られたフェルディナンド・フォン・リヒトホーフエン (Ferdinand von Richthofen, 1833 - 1905) が幕末維新时期に来日した時の日記を訳したものである。訳稿は最初熊本大学文学部の『文学部論叢』、次いで本誌『総合科学』に数回にわたり連載したものを 1 冊にまとめたものである。出版に際して訳文の推敲は勿論、詳しい訳注と索引 (人名・地名・事項) を添えた。さらにかねてリヒトホーフエンを尊敬してやまない地理学専攻の西川治東大名誉教授は序文を寄せられた。西川先生は『文学部論叢』に載った拙訳の存在をネットで知り、当時熊本大学文学部教授であった山口守人氏 (地理学) を介して面会に來られた。そしてリヒトホーフエンに対する熱い思いを語られ、ぜひ日記を完訳するようにと激励されたのを思い出す。

さて、出版してみると思いのほか反響があった。出版されると直ぐに日経の記者が拙宅まで訪ねてきてインタビューを受けた。こういうことは初めての経験だった。まもなく同紙の文化欄に「独科学者の幕末明治紀行」という見出しで拙文の紹介記事が載った。日経の文化欄は読む人が多いらしく宣伝力があり版元から初版は売り切れが予想されるので増刷したいとの連絡があった。その後、熊本学園大学の山中進教授は日本地理学会の機関誌『地理学評論』に掲載された詳しい書評 (佐々木博氏執筆) のコピーをわざわざ送ってくださった。日本山学会の機関誌『山』などでも取りあげられた。さらに 2014 年 9 月 14 日には鹿児島で開かれた日本地質学会に際して地質学史懇談会から講演を依頼され「リヒトホーフエンの見た明治初年の鹿児島」と題して話したこともあった。

『リヒトホーフエン日本滞在記』は日独文化交流史研究の一環として翻訳したのだが、むしろ地質学者や地理学者から評価されたように思う。それは決して翻訳が優れていたということではなく、原著者に対する興味からであろう。リヒトホーフエンは日本では中国への進出とともに関心が高まった昭和 10 年代の後半に『中国<第 1>』 (望月勝衛・佐藤晴生訳、岩波書店 1942 年) や『支那旅行日記』 (海老原正雄訳、慶応書房 1943 年) などが翻訳された。しかし戦後は残念ながら、シルクロードの命名者とか、瀬戸内海的美しさを讃えその保護を訴えた人として、あるいはまたスウェーデンの探検家スウェン・ヘディンの師として取りあげられる

ことはあっても、ごく一部の専門家以外には殆ど忘れられていたとってよく、彼の著作が翻訳出版されることもなかった。しかし彼の地質学、地理学上の業績、就中中国研究の先駆的業績、さらにドイツ地理学会の要職を務めたことなどを考えるとリヒトホーフエンはアレキサンダー・フォン・フンボルトに次ぐ地位の学者であったと言えよう。ここに彼の業績、方法、人となりを通り越して伝えたアルフレート・ヘットナー<sup>1)</sup>の論文を翻訳する所以である。「地理学に対するフェルディナンド・フォン・リヒトホーフエンの意義」(*Ferdinand von Richthofens Bedeutung für die Geographie*)と題するこの論文はリヒトホーフエンの死を受けて執筆されたもので、*Geographische Zeitschrift* 第12巻(1906)1号の巻頭に掲載された。ともあれリヒトホーフエン亡き後ドイツ地理学界のリーダー的存在であったヘットナーのリヒトホーフエン観を知るには好個の文献だと思われ、地理学史的にも重要なものではあるまいか。拙訳が日本におけるリヒトホーフエン再評価につながる一助となれば彼の日本滞在記を翻訳した者としてこれに過ぎる喜びはない。なお、地質学の専門用語については山田直利氏の御教示を頂いた。

---

前年10月6日、ドイツだけでなく広く一般にも科学的地理学の指導者で大家と認められていたフェルディナンド・フォン・リヒトホーフエンがその死によって我々から奪われてしまった。彼の人格と重要性の詳しい評価は、弟子たちのうちの誰よりも彼と同じ研究の道を歩いてきた人の手によって書かれるであろうが、年頭に際し、彼のいない新年を迎えるに当たり、彼を偲び、我々にとって彼はいかなる存在であったのか、彼の死とともに何が失われたのかを意識することは礼儀にかなっている。ここでは個人的な尊敬と感謝の気持ちはさておき、飾らない言葉で彼の科学的な重要性を概略することになる。

リヒトホーフエンは元来地質学者であった。大学卒業後、これは部分的にはウィーンの地質学院での仕事でもあったが、アルプス山脈、とりわけ南チロルとフォアアールベルク、後にはカルパチア山脈での彼自身の調査研究を開始した。既にこの青年時代の仕事は非凡な観察力と、科学的推論の驚くべき大胆さと自信を窺わせるものがあり、観察及びそれに結びついた仮説は後年の研究によってあらゆる本質的な点において正しいことが認められた。ブレゲンツェルヴァルトに関する彼の最初の研究において彼はそれがアペンツェルの石灰アルプスと近縁関係にあることを証明し、同時にアルプスの2つの異なる構造区の間境界としてのライン河線の重要性について言及した。彼は、彼のプレダッツォ<sup>2)</sup>周囲の記載地質学的な記述においてはポーツェンの斑岩プレートについて明確な観念を持ち、また天才的な直感で南チロルのドロミーテン山脈を古いサンゴ礁として理解した。カルパチア山脈での調査は、それは若い溶岩が老化した結果であると理解する基礎となったもので、彼は後年その説をより完全なものに仕上げた。

1860年リヒトホーフエンは、フリードリヒ・オイレンブルク伯を団長とする中国、日本、シャムへのプロイセン使節団に参加した。使節団の目的はこれらの国々と通商条約を締結するためであった。この使節団の帰国後、彼は独自に旅行を行った。その後彼は12年間ドイツを離れていたが、やっと1870年(正しくは1872年—訳者注)に帰国した。彼はこの旅行によってインドシナ半島とインド、及び中国、日本、北米コルディレラ山脈<sup>3)</sup>の大部分を根本的に学んだ。これらが彼を偉大な研究旅行家にした。

リヒトホーフエンは旅行家としてはアレキサンダー・フォン・フンボルトとよく比較された。つまり彼は旅行と旅行中に積まれた豊富な体験が後年の彼の学問的活動の基礎となって

いる点でフンボルトと似ているだけでなく、両者の旅行はまた他の人々の模範となり、研究旅行の新時代を確立した。フンボルトには先人がいて、彼は最初の人ではなかったが、最も偉大な科学的、特に地理学的な研究旅行家であった。地理学に対する彼の旅行の重要性は、彼の注意は単に個々の博物学的な事実に向けられたのではなく、それをいつも国土全体の自然との関連で理解したこと、すべての国々の完全な地理学的特性描写を行ったことである。その後数十年の卓越した研究旅行者たちは彼が開いた道を歩いていった。リヒトホーフエンの場合も大きな地理学的な解釈に達しようと努めていることではフンボルトの模倣であることは明白である。しかしこの努力は彼の場合は特別な方面に向けられている。彼は一面において、自分にかなり大きな制限を課して、フンボルトが追い求め、全体として到達したような多面性は、個々の学問分野がかなり大きな訓練を要するようになると、もはや不可能であった。リヒトホーフエンは時として植物や動物のコレクションをしたようだが、それは彼の本来の研究活動以外のものだったし、いろいろなことに手を出して中途半端にならないために天体観察も避けていた。彼は自分本来の仕事は、地形の正しい理解が主要となるルートマップの作成、及び山岳構造と土地の地形形成並びに集落と人々の交通が前者に依存しているとの見解の科学研究にあると見ていた。だがこうした限定によって彼は彼以前のどんな人よりも深く自分の課題を理解し、それまでは殆ど未知であった国々を、その自然の主な特徴において科学的-地理学的に理解させ正しく見せたのである。

科学的研究旅行というこの新しい方法により彼はフンボルトのように同調者を得た。その当時まで自然科学の旅行者は主として植物学者ないし動物学者あるいは地質学者であったが、これに対して地理学者はただ発見旅行者であると認められていた。そして地理学の研究旅行者の本当の任務は正に地誌の作成にあると見なされていたので、地表を特に堅い地球表層部の構造と形態であると解釈することは今では科学旅行家の自明の研究対象となった。従来部屋に閉じこもっていた地理学の研究は今や自然の中へ出てゆき、独自の観察上の成果を挙げ始めた。若い地理学者にとってフィールドで観察し、出来れば数年外国へ旅行し、そこでたっぷり観察するだけでなく、自ら研究できるようになったのは主としてリヒトホーフエンのお陰である。我々がここ数十年の間に世界の多く国々のかなり深い科学的理解の点で為しえた大きな進歩は、勿論交通手段の近代化によって非常に容易になったが、リヒトホーフエンの実例と学説がきっかけであった。リヒトホーフエンはすべての若い研究旅行者にとって快く助けてくれる、経験ゆたかな助言者であった。彼の助言がどれ程大きく役立ったか計り知れない。個人的な激励の枠をずっと越えて、彼は研究旅行者の活動に、地質学と自然地理学に関する観察のための彼の優れた指導と、その後の研究旅行家向けの案内書の改訂版<sup>4)</sup>によって有益な影響を与えた。

リヒトホーフエンは彼の研究旅行の成果の一部しか発表しなかったと云わねばならないだろう。残念ながら彼は、—彼自身のちにそれを大変残念がっていた— 彼が行った旅行に関連する記述を残さなかったが、実現していたらそれらを彼の卓越した観察力、人間的なものに対するオープンな感覚、気高い表現の才能によって古典的な旅行記になっていたであろう。ジャワ島についての誰にも分かる叙述を含んでいた完成した原稿は中国内陸部を旅行中、保管のために預けていた上海の倉庫から盗まれた。彼の北米の観察からは火成岩の年代順に関する重要な研究とカルフォルニアの金鉱床に関する論文だけを発表した。彼が旅した多くのアジア諸国での観察は彼の講義の中で折りに触れ活用され、研究旅行者のための案内書や、中国に関する著作の第1巻に収められたアジアの地理学的概要や、最近の東アジアの地形学に関する深い考

察の寄稿論文のような個々の論文の中で活かされた。中国北部の観察だけは中国に関する著作の第2巻に体系的にまとめられた。さらに最後の数年間は中国南部を含む予定の第3巻の作成に熱心に取り組んでいた。せめて部分的でも出版されるようにその仕事が支援されることを希望したい。彼の日記から彼が旅行した他の国々の地理に関する個々の部分を引用することも恐らく可能だろう。

しかし多くのものが未発表のままなので、豊かな学問的成果をもたらした旅行は少なかったこと、アジアの科学的知見は多分ほかの人によってはリヒトホーフエンによってほどには促進されなかったと言える。アジアの、特に中央アジアの地理学的概観を彼は自身のものと、他の観察をまとめながら彼の『中国』第1巻の前半において行ったが、それは山岳構造の理解において、また中央及び周辺の景観の相違の理解によって、アレキサンダー・フォン・フンボルトが33年前に描いた我々の知見の似たような総括を越えた本質的な進歩を意味するものである。中国の自然地理学はそもそも彼によって初めてその基礎が築かれたと言ってもよいだろう。

しかしリヒトホーフエンの研究の学問的影響は中央及び東アジアの地理学をはるかに越えている。彼自身多くの箇所で、アジアの他の地域と他の大陸の形成が示すそれらの国々との類似性を指摘したし、他の人々もリヒトホーフエンの研究と研究法を地球上の他の地域に適用した。新しい知的社会の潮流が彼から流れ出て、地理学に有益な刺激を与えた。

彼の学問的意義の重点は固い地球表面の形態学にある。彼のアジア研究の大部分のほかに、とりわけノイマイヤーの案内書 (*Anleitung*)<sup>5)</sup> 中の彼の論文や彼の研究旅行家のための案内書はそれを扱っており、両者とも科学的観察の直接の指導書を越える意義があり、独創的で科学的価値のある多数の説明を含んでいる。地表の形態学が、彼が大陸の比較概論と題した素晴らしい講義の主たる内容でもあった。彼の関心は地球の内部構造及び地殻表面の改変に向けられた。彼は内部構造に関する知識を、アジアの山岳の明快な叙述によってのみならず、同形及び異形の褶曲山脈の区別や曳裂弧の理論のような一般理論によっても広げた。しかしこの点では彼は他の人たちと変わらなく、この部門に全精力を捧げた、彼が尊敬するエドゥアルト・ジュース<sup>6)</sup> と比べると影が薄くなるだろう。それに対して地殻表面の改変の理解力では彼は指導者であり大家だ。そもそも最初にそれを独立した学問分野にしたのは彼だ。ハットン<sup>7)</sup>、プレーフェア<sup>8)</sup>、ライエル<sup>9)</sup> 以後の英国の地質学者たちは地表の変形の過程に注意を払い、そこから地表の形態を説明しようとしたが、彼等はこれらの研究に際して殆ど全くその母国の説明の範囲に留まっていて、ある程度の一般性から抜け出せなかったもので、或る偏った見方を取り続けた。ドイツの地質学者たちは記載岩石学者か層位学者であって、地形学の問題に対してはかなり無関心であった。これらの問題はドイツでは解剖学者リュートマイヤー<sup>10)</sup> (1869) のアルプスの渓谷と湖沼の研究によって始めて、そして比較地理学のペシエル<sup>11)</sup> (1867) の新しい問題によって紹介された。しかし前者は孤立していて、後者は比較地図学及び文献学に基づく方法によって従来得られた成果をまとめるのには適しているが、独自の新しい研究には向いていないであろう。リヒトホーフエンは彼の研究を自然における直接の観察から始め、彼の賢明な、しばしば天才的な観察の解釈によるか或いは彼の旅行・観察地域内での用意周到の比較研究によって結論を得、その後初めてより広大の地域にわたる比較的方法の応用によってその確証を求めた。彼はそういう方法でそれを実り多い個々の研究の対象にした。個々にも彼は方法を修練し、事象の解釈のための理解力を研ぎ澄ましたのであって、とりわけ、自然ではなく、つまり個々ではなく、地理学がそれまでばらばらに利用していたすべての特徴に基づいた類型の目的を意識した作成によって、科学的性格付及び地形と土質の成因論

的観察の実行できる道を教えた。地表の形態学は彼によって確固とした科学的特色を持つようになった。そもそも地理学的土壌学は彼によって初めて基礎が築かれた。地表の科学的知識を広げることになった彼の多くの見解から、ここでは最も重要なものだけを強調しておく。ラムゼー<sup>12)</sup>に結びつく海食による準平原生成理論はその一つである。この理論はリヒトホーフ自身がもともと信じていたように、広範囲に应用できるかどうかは少なくとも疑わしい。——彼自身も最後には、この説明の一般的応用性にもう固執していなかった——大抵の準平原はむしろ大陸に、乾陸上に (subaärisch) 発生しなかったのかどうか。しかしそれは堅い地殻の非常に巨大で際立つ形成物の一つをはっきりと捉えることを教え、多数のかなり小さな、海岸に近い準平原 にとってはぴったり当たった。彼が特に中国南部で知ったリアス式海岸のタイプを提示したことは大変重要であり、たびたびそれと一緒にたにされていた。しかし氷河による改変が見られないことから、それと区別されていたフィヨルド海岸と明確に区別したことも重要であった。リヒトホーフはその上、それまで個々の海岸の地形にのみ行っていた成因論的な観察をすべての海岸に広げた。彼は似た方法で地表の形態と土壌も扱った。彼はアジア旅行を始めるとすぐに熱帯地方で広大なラテライト (紅土) の土壌に出会い、それは様々な岩石残留堆積物であるかもしれないこと、その発生には気候が岩質を決めるものとして大きな役割を果たすことを見抜いた。だが彼の実り豊かな科学的発見は地球の広大な乾燥地域における地勢と土壌形成の解釈であろう。それまでは実は地勢の相違は山岳構造と岩石構成の違いによるのみ見たが、その相違を改変力の違による相違であることが無視された —— 氷河による土壌形成の研究は当時はまだ初期の段階にあったからである —— これに対してリヒトホーフは土壌形成の過程は気候の湿度または乾燥による、つまり海への流出口が存在するか、しないかによることを証明した。個々にはこの理論にはなお幾多の異論や疑問の余地があるが、流出口のない地域での堆積による高原の成立と圧倒的な蒸発地帯での塩分の濃縮、大草原における塵埃の堆積、及び黄土地帯は昔ステップ地域だったとの判断は大きな科学的成果であって、現在かなり確かであると見なされるものであろう。砂漠の剝削に関するすべての後年の研究は直接これに関連がある。しかし、つまり湿潤の気候における土壌の形成の理解も、まさに乾燥地帯の全く異なる土壌形成の認識によって著しく促進されたのである。

リヒトホーフの最大の科学的業績がたとえ大地の表面の研究にあるとしても、彼が実際いつまでも地質学者に留まっていた、地理学を完全に地質学の領域に押し込んだと見るのは偏見にすぎない。彼は地質学者として出発したが、地理学者となって帰ってきた。大抵の地理学者が感謝して認めているように 彼の研究は地質学をも十分に実り豊かなものにした。だが彼の研究はその最大の意義を、地理学の普及を絶えず追求することによって、大地の表面の現象と他の大地の諸要因との因果関係に注意を払うことによって地理学のために獲得するようになった。彼はある種の誇りを持って地質学の出身であることを思い出したようであり、それによって地質学の方法と理論の表面的応用を免れていると感じていた。だが彼の科学的問題の解釈は完全に地理学的になった。重点は地表の研究にあり、旅行中の観察の報告では部分的に純粹に地質学的なものに及んでいる彼の中国に関する著書において、そして個々の論文と講義においても彼は他の地理学的現象、気候、植物界、そして特に人間の移住・交通・生業事情に対して正当に評価がなされた。彼の中国 18 省の国土の理路整然たる叙述、『中国』第 2 巻の序章にはこの国の地理学的な特性描写の傑作が見られる。

人類地理学という名称を作り、人類地理学のアイディアに富んだ入門書を書き、また後にそれを幾多の大きな著作と数多くの小論文によって豊にしたラッツェルは、抑もはじめてこれを

地理学の新たな一分野にしたとの見方がしばしば述べられた。これは変な誤解だ。人間の地理学は既にフンボルトとリッターによって育成されたものだ。リッターの幾多の弟子たちメンデルスゾーン<sup>13)</sup>、カップ (Kapp)、コール<sup>14)</sup>、クリーク (Kriegk) 等は人間の地理学に関する発想の豊かな研究を発表しており、ペシエルは既に新しい諸問題において、特に後に民族学に引き継がれた論文において若干の非常に重要な人類学的テーマを論じ、カール・ノイマン<sup>15)</sup>、キルヒホーフ<sup>16)</sup> 等は人間の地理学的現象を自分たちの講義において統計学の教科書のような外的方法ではなく、科学的・因由的に扱った。リヒトホーフエンもラッツェルの人類地理学が出版される前に既に『中国』第1巻において大アジア民族移動の古典的のような人類学研究を出した。この研究の意義では大部分は彼の旅行中に集めた豊富な経験の宝庫を利用し尽くして彼も後年多くの貴重な寄稿により人間の地理学を促進した。彼の研究旅行家のための案内書を読む人があれば 人間の大地依存性に関するたくさんの示唆と教訓を見いだすだろう。本誌第1号に執筆された下関講和条約に関する論文<sup>17)</sup> は私の見るところでは、これまで書かれた最も素晴らしい政治地理学的研究の一つだ。中国の交通に関する彼の素晴らしい見解にはブレスラウ地理学者の日のすべての参加者たちは感銘を受けた。彼の移住と交通についての講義は彼の最も素晴らしい講義の一つであったという。それゆえ、彼が人間地理学の敵対者であったとかそれについての知識を欠いていたとするのは全くの誤解である。ただ彼は、全く一般に通じる、地表の諸事実に関連性のない、人間の現象の空間的關係についての観察には馴染めなく、それらに対して彼はかなり懐疑的であった。彼は人間の地理学においても常に大地との関連を探し求めた。彼の人類地理学の業績は地表の地形と土質についての深い理解と密接な関係があった。海岸地帯の発生学的な把握は種々の海岸をその交通上の価値によって評価することを可能にし、大草原と砂漠の鋭い理解力は彼に民族移動の自然条件を教えた。オアシスの明確な自然観は彼にオアシス文化の本当の性格を教え、東アジアの大断層の把握はその交通地理学的影響力の把握と結びついていた。彼が人間の地理学の多くの部分で、特に地理的位置と交通に依存する、その説明はラッツェルの大きな功績であるところの文化財の普及の問題にあまり注意を払わなかったことは認めるにしても、土壌の直接的条件に依存した移住方法の、交通の、経済的生産の認識を彼は著しく押し進めた。そして彼自身の研究を越えてその地理学的解釈の意義を呼び覚まし、形成した。

成年の男子が大きな感銘の影響を受けて或る学問から、つまり未だ確固とした学問的構造を持たず疾風怒濤の時期にある学問に移ると、またこの学問の大学教師として勤めるように招聘されると、この学問の本質と課題について自分と他人に対して釈明する必要性を感じる。リヒトホーフエンの方法論上の見解は、一部は彼の名前の権威によるが、主として地理学の最近の発展のための彼の基礎付けの本質的重要性によって基準になった。

地理学は既にカール・リッター自身のもとの、さらにもっと多くリッター学派において次第に柔軟さを失い、陸地の自然の記述的、しばしばかなり表面的描写において、さらに多かれ少なかれ自然の人間に及ぼす目的論的評価において行き詰まったしまった。ペシエルは、その間自然科学と自然科学関係の旅行者によって振興された自然地理学を体系的地理学に導入し、それによって地理学における新しい学界の時代を作った。しかし彼は正しい方法論的視点を見つけられなかった。地理学は、彼がそれを一般地球科学として理解したことによって蓋然性の科学の範囲を大きく超えてしまった。それは他の自立した諸科学をその中に取り込もうとし、そのために課題と方法の明快さと確実性を失った。こうした過剰さに対してリヒトホーフエンは彼の『中国』第1巻の結びの言葉において賢明な自己制限への真剣な警告を発し、全地球では

なく地表が本来の地理学の対象であるとした。彼がその際ベシエルを越えてリッターに戻ることを指示したとき、それは彼の場合もちろん一面的に人間に注意を向けた観察法ではなく、地理学の本来の課題である地誌学への回帰を意味していた。個々には彼の解釈はまだ一面的なところもあったが、まだ彼が元来地質学の出身であったことにかなり強く規定されている。固い地殻の研究が依然として中心になっており、地表の他の現象群は固い地殻に依存する場合のみ地理学の対象になることになった。彼は数年間大学で教鞭を執り、それによって自分の研究の要求を越え地理学の全領域について自分を鍛える必要性に身を置いた後、こうした片寄った見方を克服した。

一見すると、なるほど彼がライプツィヒ大学就任演説で行った地理学の定義は彼の『中国』の結びの言葉と同じように見えるが、実際は変わっていた。地理学はここでも再び地表に関する学問と定義されたが、もはやここでは地表は固い地殻だけを意味するものではなく、地表で起こる無機的及び有機的自然並びに人間生活のあらゆる現象の総体を意味している。ここでは固い地殻はその支配的位置を失った。それはただ他の諸現象と並んで同等の権利を有するに過ぎず、地域的な分布の視点、生物地誌的視点が注目を集めるようになり、地理学的観察法の重要な指標になっているように見える。地理学は一般地学ではなく、そのためにリヒトホーフは Erdkunde という名称も避けたかった、そうではなく地球の地誌学、つまり異なる地球空間及び地球空間の複合体としての地表に関する知識である。このリヒトホーフのライプツィヒ大学就任演説は新しい地理学の綱領<sup>プログラム</sup>となった。これは今日でも確かにしばしば一般地理学と定義づけられことが多いが、実際には地理学の研究と教育はその後ますます地誌学的研究の狭い領域に戻っていて、見通しのつく目標と方法を持つ特定の研究領域を作った。

リヒトホーフの活動は最も直接的に彼の大学での教え子たちに役立った。確かに多くの彼の研究成果と見解、つまり比較地誌学のすばらしい見解のようなものと、彼の交通及び集落地理学の研究は従来彼の弟子たちだけに知られたのである。ありふれたものでなく彼の精神を表し、貴重な新しさを含んだ彼の講義を、広く専門家と地理学の発展に参加しているすべての人たちに印刷して提示することは彼の弟子たちの義務であろうし、師に対する感謝の義務だろう。そして彼らは喜んでそれを果たすであろう。リヒトホーフは大学では大勢の聴衆を熱狂させる雄弁家ではなく、彼は静に、半ば原稿を読むように、時々少しつかえるように話した。彼は全く本筋からはずれた人気取りの手段を用いることをいつも拒否した。聴衆の大部分にとって彼の講義の内容は難し過ぎることもあり、程度が高過ぎたが、歴史家や言語学者の場合、彼は余りに多くの自然科学的予備知識を前提としていた。それ故、彼の講義は長年の間でその重要性に相応しいほどの聴講者はいなく、しばしば彼の聴講者は、彼の幾人かの同僚が中小の大学で講義している場合より少なかった。しかし彼の講義は、既にある程度の基礎を学んでいる真面目な学生にとっては素晴らしいものだった。彼の講義は彼らに決して孤立しているのではなく常に大きな視点のもとに総合されている多量な科学的知識を与えた。それには広い展望が開けていた。深い科学的厳粛さは特殊な内容を越えて教育的に影響があったに違いない。私が若い博士として彼の指導のもとに研究を続けるためにボン大学へ駆けつけたとき、彼のヨーロッパについての講義が私にいかにも深い感銘を与えたかを思い出す。私はそこで、憧れていたが自力では手の届かなかった或る地理学的観察法と出会った。彼のもとでの私の研究はまもなくして私の最初の南米旅行によって中断したが、そこから帰国したら、この間ライプツィヒへ移住していたリヒトホーフのもとへ帰るのが当然のことだった。他の多くの人々も私と同様だった。本来の大学の勉強を既に卒業したりヒトホーフの年長の聴講者の数

は、モムゼン<sup>18)</sup>を除けば、他のドイツの大学教員の誰よりも多分多かつたであろう。特に彼のコロキウムにはこれら年長の教え子たちが大勢常に学生と一緒に集まっていた。比較的新しい地理学の研究について報告させたこのコロキウムは、比較的若い学生、とりわけ地理学を単に副専攻としたそうした学生にとっては全く適さなかった、私には少なくとも、言語学と歴史学の専攻生はもっと自然科学的な、特に地質学の報告を、自然科学者は歴史・地理学上の報告を時々理解しないで聴き、あるいは全然聴いていないかのようになってしまう。彼らは、特に初心者のための演習をリヒトホーフエンが助手のバシーン<sup>19)</sup>に担当させた彼のベルリン時代の活躍の最後の年になって初めて彼らに相応の権利が完全に認められたのである。しかし特別に地理学を学んだ円熟した参加者たちはこのコロキウムから大きな利益を得、そして喜びと感謝の念で当時を振り返っている。いつも最も大きな利益を受けるのは対象に没頭し、大抵リヒトホーフエンのわずかな批判的コメントから問題に正しく取り組んでいるかどうか判断できる発表者自身であった。リヒトホーフエンは出来るだけテーマを発表者の個性とそれまでの研究に合わせた。時によっては彼は間違っていただろうが、彼の教え子の多くは正しい道へ導いて貰ったことに感謝していた。弟子たちに対するリヒトホーフエンの最高原理は彼らの個性を尊重することであって、決して自分の研究の道へ無理に引き入れようとはしなかった。それ故、全く異なる方向の地理学者たちも彼の門下から生まれた。彼はときどき行われたような博士作りには反対で、テーマの選択と仕上げには完全な自立性が働くようにし、提出された論文の学問的価値には高い要求を課した。それ故、彼の提案と指導のもとで作成された博士請求論文の数は比較的少ない、というのは彼は地理学の博士号の取得へ誘うよりもむしろ止めさせたからである。ひょっとしてそれによって地理学から疎外された人も少なからずいたかも知れないが、留まった人はそのために本当の地理学者になったこともあった。彼が学位論文として認めた多くの論文は中<sup>ちゅう</sup>よりずっと上であり、数編は抜群の学問的業績である。

リヒトホーフエンは大学で教鞭を執るようになった瞬間から、教師の任務を大真面目に受け止め、うれしい義務感からそれに没頭したけれど、彼の影響と活動はそれを越えていた。私は、ほかの人のように彼が激しい野心ないし広い公的な活動への衝動に駆られたとの印象を受けたことは一度もなかった。彼は大学での教授を義務として捉え、それをすることで共益になることを知っていたので引き受けたのだ。しかし彼は一度活動を始めると、それに熱中し、それを楽しんでいて、そして外部の問題をも熱心かつ真面目に処理した。すでにアジアから帰国後まもなくしてベルリン地理学会会長に選ばれ、同様に地理学会の会長であったボンとライプツィヒからベルリンに戻ったとき、再度彼はそこの地理学会会長に選出された。ある時は会長として、或いは少なくとも役員として彼は学会の活性化と組織化のために大きな功績を挙げた。彼は1899年の秋ベルリンで開催された国際地理学者会議の予定されていた議長であって、その輝かしい成功に貢献したが、勿論、彼はそのために貴重な一年の殆ど総ての、職務上求められたのではない時間を犠牲にした。傑出したドイツの研究旅行家として、また大きなドイツの地理学会の長年の会長として二重の意味で彼は前世紀の最後の数十年間にすべてのドイツの研究探検隊の組織と協議にも抜群の関与をした。ドイツの南極探検も基本的に彼の援助を受けて実現したのである。確かにその思想は主としてノイマイヤー<sup>20)</sup>の疲れを知らぬ雄弁によって呼び起こされ、覚醒されたが、それが実現したのは、何と言ってもそれをドイツ皇帝と帝国の中央官庁に働きかけたりリヒトホーフエンによるところが大きいし、彼はその計画に決定的な影響を及ぼし、後にはあらゆる非難に対してそれを擁護した。彼に割り当てられた最後の仕事は皇帝の前で南極研究の重要性を論じ、新たな探検の価値を指摘しようとした講演であっ

た。我々の植民地政策参入に際し地理学の研究が直接に政治的意味を持ったとき、リヒトホーフは植民地問題に関し帝国政府からしばしば相談される人物になった。膠州湾の獲得に際して彼は大きく関与した。数年前すでに彼は山東半島の価値を認識していて、主としてドイツ帝国政府の注意をこの地域の方に向けさせていた。そして彼は彼の素晴らしい本の中で彼の旅行体験に基づき新に獲得した植民地について論評した。中国へ出兵が必要になったとき、この国の深い知識に基づき彼は貴重な助言を行い、我が軍隊に優れた地図を付与した。彼が最後に作ったものは海洋学研究所だった。そこでは珍しいことだが博物館と学校と研究組織が一体となっていた。皇帝の個人的願望から生まれたこの研究所が大規模で、最も高貴な意味での通俗科学的性格を帯びるようになったのはリヒトホーフによるところが大きい。しかし残念ながらまさにその開設のために費やした仕事のために、彼の『中国』の著作が未完に終わったのだ。<sup>21)</sup>

深く刻まれた、力強いが親切そうな顔の長身の男性から私が受けたじかの印象は、ゆるがない、気高く高貴で、それでいて根本は好意的で愛すべき人物であった。俗受けをねらうとか、一時的にでも脚光を浴びたいなどの気持とは彼は無縁だった。彼は自分の内面的価値を意識していたが、虚栄心とか個人的な功名心はなかった。彼は重要なことを成し遂げたいと常に努力していた。外面的な成功は彼には枝葉末節なことだった。他人に対しても彼の目はいつもその核心に向けられていた。彼はときどき、思っているより多く人を見損なっただであろうし、偏見が全くなかったとも言えないだろう。しかし彼の意図はいつも純粹であったし、しっかりと努力する人々を支援し、適材適所に努めた。彼の弟子たちは深い愛情と尊敬の念をもって彼を仰ぎ見たし、友人たちは愛着を感じていた。彼から遠く離れていた人たちも彼の業績を評価し、称賛したが、妬みや中傷は殆ど起きなかった。

リヒトホーフは偉大といって差し支えのない現代の数少ない学者の一人である。彼の学問的業績は科学史に残るだけでなく、彼自身は偉大で高貴な人物の一人として記憶されるであろう。

#### 訳注

- 1) アルフレッド・ヘットナー (Alfred Hettner, 1859 - 1941) ドイツの地理学者。ハイデルベルク大学教授 (1906 - 28)。南米、ブラジル、アジアに研究旅行を試み、その際来日して (1913)、日本アルプスを踏査し、氷河の条痕のあるヘットナー石を発見した。主として地誌を研究したが、地理学方法論にも力を傾け、19世紀後期から20世紀へかけて地理学理論のリーダーだった。
- 2) プレダッツォ (Predazzo) : イタリア共和国トレンティーノ＝アルト・アディジェ州トレント自治県にある人口約4500人の基礎自治体 (コムーネ)。
- 3) コルディレラ山脈 (Kordillerenland) アラスカ国境に近いカナダ北部だけでなく南北アメリカ西部も含む広大な地域。
- 4) *Führer für Forschungsreisende*. (1886) の第2版 (1901) を指す。
- 5) 気象学者で探検家でもあった Georg von Neumayer (1826-1909) が編集した旅行中の観察法を記した案内書 (*Dr. von Neumayers Anleitung zu wissenschaftlichen Beobachtungen auf Reisen*. 3. Auflage, 1906)

- 6) ジュース (Eduard Suess,1831-1914) オーストリアの地質学者、古生物学者。ウィーン大学教授 (1857 - 1901)。構造地質学、造山論の論文が多く、特に『地相論』 (*Das Antlitz der Erde*,3巻、1885 - 1901) は地球収縮説に基づいて世界の地質構造を論じたもので、19世紀の地質構造学の記念碑的著作とされる。息子の Franz Suess (1867-1941) も地質学者として著名。
- 7) ハットン (James Hutton,1726-97) 英国スコットランドの地質学者。初め農業に興味があったがのちに物理学者や数学者と交流するようになって、地質学を研究するようになって、英国各地を研究旅行し地質現象を観察して、これを統一的に説明しようと努めた。ハットンの学派は火成論者 (Plutonists) と呼ばれ、水成論者との間に激しい論争が続いたが、最後に火成論が勝利した。
- 8) プレーフェア (John Playfair, 1748-1819) 英国の数学者、地質学者。エディンバラ大学に招かれ最初は数学、のち自然哲学教授となる。地質学と鉱物学についてはハットンの影響を受けた。
- 9) ライエル (Sir Charles Lyell, 1797-1875) 英国の地質学者。オックスフォード大学で地質学を学び、のちロンドン大学教授。地質学学会会長。主著『地質学原理』 (*Principles of geology*, 3巻、1830 - 33) は地質学の近代的大系を確立したとされる。
- 10) リューテイマイアー (Ludwig Rüttimeyer,1825-95) スイスの動物学者、考古学者。バーゼル大学教授。化石動物の研究で知られる。
- 11) ペシエル (Oskar Ferdinand Peschel,1826-1875) ドイツの地理学者。ライプツィヒ大学教授。自然地理学を重視し、近代の地形学的観察の開拓者となった。
- 12) ラムゼー (Wilhelm Ramzay, 1865-1928) フィンランド生まれの地質学者。新版地学事典 (平凡社) によると、1889年から没年までヘルシンキ大学の地質学・鉱物学教授。第四紀における Kola 半島の地質学的発達 (1888) を発表。Fennoscandia の海岸線変動、地殻変動による上昇、海面変動の研究を最初に行ったことで著名である。
- 13) メンデルスゾーン (Georg Mendelssohn, 1794-1874) ドイツの地理学者。主著『ゲルマン的ヨーロッパ』 (*Das Germanische Europa*, 1835)。
- 14) コール (Johann Georg Kohl, 1808-1878) ドイツの地理学者、歴史家。主著『地表の形成に依存した人間の交通と定住』 (*Der Verkehr und die Ansiedelungen der Menschen in ihrer Abhängigkeit von der Gestalt der Erdoberfläche*. 1841, 21850) は近代交通地理学の基本図書。
- 15) カール・ノイマン (Karl Friedrich Neumann, 1793-1870) ドイツの中国学者。歴史家。中国に渡り多数の漢籍を購入、ドイツに持ち帰った。ミュンヒェン大学の中国語教授。
- 16) キルヒホーフ (Alfred Kirchhof,1838-1907) ドイツの地理学者。ハレ大学教授 (1873 - 1904) 地理学の内容及び方法の深化に努めた。
- 17) 「地理的關係における下関講和条約」 (*Der Friede von Schimonoseki in seinen geographischen Beziehungen*) は Geographische Zeitschrift 第1巻 (1895) pp.19-39.
- 18) モムゼン (Theodor Mommsen, 1817 - 1903) ドイツの歴史家。ベルリン大学教授 (1858 - 1903)。ローマ帝国史、ローマ法の研究で知られた。ノーベル文学賞受

賞。

- 19) バシーン (Otto Baschin, 1865-1933) ドイツの地理学者。1892 年以後 ベルリン海洋学研究所の助手を務め、1893 ~ 94 年に最初の気球による研究を行った。リヒトホーフエンの勧めで 1912 年までベルリン地理学会の *Bibliotheca Geographica* を発行人となった。またベルリン大学の地理学研究所の管理官でもあった。
- 20) ノイマイヤー (Neumayer) については注 5) 参照。
- 21) リヒトホーフエンの代表作の『中国』(副題: リヒトホーフエンの旅行の成果、並びにそれによって得た結論) は生前第 1 巻 (1875)、第 2 巻 (1882) が出版されたが、第 3 巻 (1911) は死後、弟子のティーセンが遺稿をまとめたものである。第 4 巻 (1883)、第 5 巻 (1911) にはリヒトホーフエンが中国で採集した化石を古生物学者が研究した結果が記されている。これら本文 5 巻と詳細な地図 2 冊からなる本書はのち復刻版も出た。